三章桔梗が原の場より突然として說起し偶然途中にて亡命せる勝頼と姫とを救ふ事を叙し此際怒猪と戰うて勘介が脚を傷け一眼を失ふ事を叙し次いで第四章に至り信玄が勘介を招かんとして雪中に彼れが茅屋を訪ふ事を叙し勘介の母が信玄の器に服して勘介を奉公せしむる事を叙す、以上總て物語風の結構にして事々皆別々也第七章輝虎本城の場は輝虎が勘介の智勇を慕ひて之を招かんが爲に彼れが母を招きこれを倆にして勘介を手に入れんとする條也此章ある勘介の老母のみは稍や悲劇ぶりの旨味を含まざるにあらねど其中心とありて進退せるは此章と第八章なる直江山城館の場のみなればはと〳〵前後には關係あし其次第九章天目山の場は又飜りて勝頼と姫とを叙し結局合戰の上場は彼の兩將の格闘を見せたり話の筋をいへば互ひに相通じたれども性情よりいふ因果の關係は全く支離滅裂せり要するに此作を三裂せば三種の性情劇即ちマアロウ、シエークスピヤ的ドラマを作るに堪へたり勘介若くは其母を主人公として一篇の悲劇を作るに足るべく信玄と謙信とを双主公として一篇の勇壯ある ドラマを作るに足るべく勝頼と姫とを主公として更に一種のトラジエ、コメデーを作るに足るべし

『めいどの飛脚』を讀みて梅川を評す

竹のや主人の說によれば近松が世話物をかきはじめしは五十以後なりとあれば此作も老後の筆あることたしかあり筋は例の痴情を元とし人物は男を富商の世繼とし女を色町の遊女とし舞臺を浪花としたる例の如し上中下三卷のうち下卷は所謂道行の幕(梅川忠兵衛あひやひかご)にて大詰の幕をも兼ねたり案ずるに此作も『天の網島』も雙つながら痴情の悲劇なれど痴情の成立も其發達も同じからぬ所あり隨ひて大破裂の原く所も彼れと此とは趣を殊にせり『天の網島』にては戀情の成立もつぱら女主人公の意氣地に原づけり即ち純粹の戀情にあらで一種の義理なり此故に通篇義理と人情と相繋り戀の發達も大破裂もほとんど義理を離るゝことあし約言すれば彼作の本體は義理と情との軋轢あり當篇は然らず先づ戀の成立異あり此差別あらかじめ作者の心にもありしにや『天の網島』の上の卷にては屢々戀情の由來をほのめかしたる所とては下卷(あひやひかご)の中に忠兵衛の通篇戀情の由來を說きたるに此作にはさる事なし言葉あるのみこれとても作者に此心ありてものしたるにあるまじけれど批評

の日より見れば山來を語りたるものと見て不可なかるべし其言に曰く「それ覺にてかいつのことかの初雪の朝ごみに寐巻ながらに送られし大門口の薄雪もを今降る雪もかはらねど變り果たる身の行衛我ゆゑ染めていとはしや元の白地をあいさぎよりこひは磨田の八幡に起請誓紙の筆の罰」云々と、思ふに此二人の戀中は馴染むにつれて深くおりし類にておのづからなる因果あらん素より其間に種々の人情くさ〳〵の義理からまりて相思を募らする因緣となりしならんが其因緣の影の殘らざるを見れば假令ありきとするも強大なる主因にはあらで微弱なる客緣おりしこと明けし言葉を換へていへば情は先にて理は後なりしなるべし扨中の卷なる梅川が述懷の段に「夕霧の昔を今にひきかけて」と前置きありて淨瑠璃の文句を引き其藏きに「又はじめより僞の勤ばかりに逢ふ人も絶にず重ぬる色ごろも遂の寄邊となる時は初の僞も皆誠とかく唯戀路にはいつはりも無く誠も爲し緣のあるのが誠ぞや逢ふこと叶はぬ男をばしひ〳〵て思ひが積り思ひ醒にも醒むるもの」云々といはせたるを見れば梅川が戀の水上はかの觴を浮ぶるに足るといふ涓々たる細流にやありけんさすれば是人情の自然の果おり無分別無思量の中におりし戀おり分別思量より募れる小春が戀

とは差あり

小春と梅川とは其性を異にせり小春は頗る俠氣あれば義理の繫れる所には泣くまじと張る意地ありて心に泣くも色目には見にじとし目には泣くも口には泣くまじとする張あり梅川には此張見にず「つらき勤をかきのもと島屋を一すし島がくれ」して越後屋に來りあらはに我心の哀を語り「予し淸さんけふは島屋でかの田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い忠さまはまだ見えぬかせめて由緣に貴嬢の貌が見たさに貸しに來た」と質樸に懷を吐けるは所謂「思ひの定宿」の事おれば「氣兼せず底意殘さぬ」所おるべければこれは普通の人情とも見做すべきが朋輩女郎に向ひての述懷には梅川に自立の意地乏しく他人にすがりて同感を求むる趣あること見えたり客を待つ間の氣晴に遊女ども酒をのみ拳をうち「こおさまは拳の上手、よひからちよとせさまにしつけられて無念おあ敵とつて下さんせ銚子直しや」とさゞめけど梅川は打しほれ「アヽうたての酒や拳をする氣もあらばこそ此梅川が今の身を少しは泣いて貰ひたや」とうちふさぐ、此詞の身勝手にて傍若無人おる如きに切おる情見にて梅川の本性あらはれたり蓋し梅川は世間を知らぬ程の恍惚兒おらねど切おる痴情に心昏みて時々我の外の

世界を忘れ我と他人とを同じやうに思ひ我苦みを他人も苦みてくれそおものと思ふ、情に切おる故なり、さてかゝる時意地強くゞ或は他人を怨み他人を薄情と憎まん心もいづべけれど意地弱く張おきものは只打泣きて同感を求むべし梅川の如きは後の亞流なり彼れ又曰ふ「田舎の客が身請の事(云々)腹がたつやら憎いやら」と、是はとんど朋輩を骨肉と同視したる述懐とも評すべし「とはいひおがら此は先、忠兵衛さまは後手といひ『宿』の勢力一ッにて手附も渡し約束の日限きれるもいひ延し、けふまではつおがりしが云々」と取越苦勞を述べ「如何なる事が邪魔におり田舎の客に請けられては我身一つは死んでものけふ」と公言す慌惚娘が乳母の前に泣臥す時の趣に似たり「天神太夫の身でも無しさもしい金に氣がふれた店の女郎の淺ましさと世間の唱へ朋輩の掃部どのをはじめとして格子女郎衆の手前もある」とは愚痴の助太刀にもちだせし理屈にて「忠さまと本意を遂げ右や左人に唱はれし面がぬぎたうござんす」といへるは梅川が誠心の底おるべし必竟梅川の性質には奥底なく心に苦みおる時は胸を披いて朋輩に語る小春が斷腸の苦痛悲哀おるも呑んで言はぬとは趣異おりけだし此奥底おき梅川の氣質こそ多くの朋輩を得たりし源おらめ そは梅川が述懐をきく「一

坐の女郎身の上に思ひ合せて尤とつれて涙を流せし」とおるを見ても知らる奥底おき心の誠が人皆の同感を呼べるおり要するに梅川は勤の女に稀有おる質樸の本性おりこれを素直ともおどおしともいふべし是まづ小春と異おれる一點なり

且又此折の梅川の苦痛を小春の苦みに比ぶるにこれは切おれど不安心の苦みおり彼れは絶望の淵に臨めり此れには流石に頼おれど彼れには世の義理を楽てざれば望を維ぐべき便無しこれには義理の柵おく彼れは世の義理を大敵とす苦みの度をいはば小春のかた一倍おるべし而も小春は之を口外して同感を呼ばざるに梅川は頻に他人に訴ふ是れは梅川の情の小春のよりも切おるが故かといはんに『天の網島』を讀めるものは小春の情の梅川のに優るとも劣らぬを知るべし所詮二人の差は情の量の上にあらで情の作用の上にあり彼れは情を制し此れは情を抑ゑず彼れは意強く此れは意弱し是前にいへる相違より自然に派生せる結果なり

扨又忠兵衛が八右衛門に耻かしめられ一旦の腹立に前後を忘れ郎の金の封切て擲つけやがて喧嘩とおらんとせし時梅川涙にくれて二階よりかけおり「情お

や忠兵衛さま何故そのやうに逆上らんすそもや廊へ來る人のたとへ持丸長者でも金につまるいある習ひ此の恥は恥あらず何を當に人の金封を切て撒散らし詮義にあふてろうひつの繩にかゝるのといふ恥と此恥とかへらるか」と泣きくどきたるは頗る條理ありて一向にあどけあき本性とも見にす併しながら其次の言葉に「恥かくばかりか梅川は何とあれといふことぞ篤と心をおとしつけ八さまにわびごとし金を束ねて其主へ早う届けて下さんせ妾を人手に遣ともあいそれは此身も同じこと身一つすてると思ふたら皆胸にこめてゐる……氣をしづめて下さんせ淺ましい氣にあらんした斯は誰がした妾がした皆梅川がゆゑあれば忝あいやらいとしいやら心を推して下さんせ」といふ、是は理性の言葉あらず理義を說く如く情を語る如く男を諫むる如く我れを責むる如く男を思ふ如く我を思ふ如く男を主とせる如く我れを主とせる如く縞紛錯亂麻糸の風にもつるゝ如く嗚咽歔欷の聲依稀と聞え「小ばんの上にはら〳〵と玉あす涙はとばしり井手の山吹に濯く露」と相競ふさまを見る心地す是眞に至情の言葉あり其いふ所に理義もあれど理は只情の後援あるのみ情は主とありて理は客とあれり

忠兵衛既に狂憤自棄して咄嗟に梅川の身請をすまし直に相携へて走らんとす梅川が理性に富める女あらば前後の事情より推測しても忠兵衛の本心を察すべき筈なり然るに尙恍惚としてめつたにせく男をみかへり「あんぞいの一代の外聞朋輩衆へも盃事いとまごひも譯ようして徐々と出して下さんせ」と何心なく勇みたる情の女の證なり我心に裏あければ人の言葉をも疑はぬ本性の淸きを見るべし男わつと泣いだし「いとしや何も知らずか」といふ、此無邪氣質撲のうつくしさをこそ忠兵衛ならぬものも値ありと値蹈すべけれ

小春と梅川とを對していはば小春は其表派手にして其裏淋しく梅川は其裏優にて其表哀れなり小春は秋の紅葉の如く絢爛としてまばゆけれど散ゆく時は一葉をもとゞめず梅川は如月の靑柳の如し裊々と玄だれたる枝は軟かなる春の風にだに得堪へじ心に小春を畵けば鼻筋通りて眉は蛾蛩の如く丹花の唇きつとしまりて涼しき眼じりの力身楚々動人の姿態髣髴と浮ぶ、心に梅川を畵けば豐なる頰けしきばかり痩せて後髮の一筋二筋花の如き瞼うるさげにかゝり黑目勝ある星眸の中に万斛の露溢れんとし顰めたる眉の遠山に愁雲なほはのかなり彼なたは雪間の紅梅此なたは雨中の海棠、彼なたは意氣地を命とし又男

を命とすされバ義理を天とあがめ思ふ男を地としたるにこあたは男を天地とし神佛とし性命とす、小春は、嚴陰にひとり咲ける蘭の如く梅川は松に纏へる蔦紅葉の如し彼れにはおのづから自立の相あれど此れには絶にてさる相あしされバ男が本意を明し詮義の來ぬうち飛べといへばはつと驚きあきいだし「それ見さんせ常にいひしはこのこと、あせに命が惜いぞ、ふたり死ぬれば本望今とてもやすいこと分別すゑて下さんせ」と一だびは胸を据にあがら「生らるゝだけ生きて」といふ男の言葉に心變り「そふぢやいきらるゝだけそはふ」と答へ共に廊を走りいづるは情の自然といひあがら專ら男に頼ればあり切なる情にこそ主客は無けれ二人が進退を上をいへば忠兵衛は主にて梅川は從なり此編に見たる戀の小春の意地をもて主因とせる『天の網島』のと同じからぬ所以あり

戀の成立已に斯くの如く同じからねば大破裂の原因もまた格別なり『天の網島』にては戀の成立ちし元をさ〳〵女の意氣地あれば其業因綿々と絶にず最後の大破裂もをさ〳〵意氣地の作用に基き臨終の期に及ぶまでも意氣地の影を失ふこと無し然るに此作なる戀の成立ははじめより情のみによれる故情の業因絶ゆること無し

『底知らずの湖』と題して『讀賣新聞』廿四年の新年附錄に掲げしものをも卷末に添へんの心ありしが彼の文はあまりに拙劣あるが上に其の旨も獨合點に類してかたはらいたければ省くことゝしつ『底知らずの湖』は脚本の本質を比喩をもて說かんと試みたるにてシエークスピヤを動地の沼(Shake-sphere)ともぢりギョオテを驚天の沼ともぢりて双つながら底の知れざる湖に近きものありと說き万理想を容れて餘あるが眞脚本の本質なりといふ意をほのめかしたるものなり

小羊漫言　終

明治二十六年六月十六日印刷
明治二十六年六月十九日發行

定價金貳拾五錢

著者　坪内雄藏
東京市牛込市ヶ谷大久保余丁町百十二番地

發行者　江草斧太郎
東京神田區一ッ橋通町七番地

印刷者　松澤三紅
東京市麹町區下六番町十七番地

印刷所　同勞舍
東京市麹町區下六番町十七番地

發行所　有斐閣書房
東京市神田區一ッ橋通町七番地三號地

大賣捌所　春陽堂
東京市日本橋區通り四丁目五番地

大賣捌所　有斐閣雜誌店
東京市神田區一ッ橋通町七番地五號地

版權所有

各府縣賣捌書肆

東京日本橋區通一丁目　大倉書店　山梨縣甲府　拜正堂
東京京橋區南傳馬町　目黒支店　金澤市尾張町　雲根堂
東京日本橋通三丁目　丸善書店　博多　積善館支店
東京日本橋新大阪町　小林喜右工門　富山市四十物町　中田支店
東京日本橋室町　杉本七百丸　靜岡市馬場町　文源堂
東京日本橋若松町　榊原友吉堂　東海道沼津町　開榮堂
東京神田美神保町　東京海堂　遠州浜松　齋藤源三郎堂
東京京橋尾張町　東京藏屋　出雲　盛春堂
東京神田美土代町　武藏屋閣　京都南新町　便利堂
東京本郷一丁目　有終閣　神戸相生橋　熊ヶ谷久榮堂
大坂東區本町　岡島眞七　肥後熊本　あゝーや新聞舗
大坂心齋橋通り　三木佐助　岡山市西大寺町　武内彌三郎
名古屋本町　川瀨代助　肥前長崎市　安中半三郎
大坂東區備後町　吉岡平助　越後高田　室直三郎
信州長野　西澤喜太郎　信州松本　水野堂
靜岡甲府　五明堂　仙臺市國分町　山本音四郎
大坂北久太郎町　柳原喜兵衛　名古屋鐵砲町　三輪文次郎
大坂備後町　梅原龜七　名古屋玉屋町　片野東四郎
大坂安堂寺町　青木嵩山堂　越前福井　品川太右工門
京都寺町　田中治兵衛　東京神田區表神保町　青柳堂
肥後熊本　長崎次郎　同本郷區元宮士町　盛春堂
京都河原町　大黒屋書店　同京橋區彌左衛門町　巖々堂
鹿兒島六日町通　吉田幸兵衛　同芝區三田一丁目　福島書店

賣捌所

同同區三田同朋町　岸田書店　同京橋區銀座四丁目　信文堂出張店
同同區三田一丁目　書堂　同南佳原郡大森南原町　平林新平
同本郷區元宮士町　解明堂書店　同麹町區三番町　日成堂
同神田區錦町二丁目　其故堂　同芝區三田同朋町　芳文閣
同京橋區川雲町　山田屋甚七　同麻布區飯倉三丁目　岡田書店
同芝區佐久間町一丁目　粟原書店　同日本橋區本銀町三丁目　大西書店
同芝區愛宕下町四丁目　飯田書店　同芝區琴平町　新盛堂
同京橋區銀座二丁目　山本益二郎　同同區南佐久間町一丁目　安井文欽堂
同神田區小川町　大塚書店　同日本橋區本町貳丁目　庭花堂
同同區鍛冶町　吟松堂書店　同芝區櫻田本郷町　萬松堂
同京橋區尾張町二丁目　佐々木書店　同同區同町　小出書店
同本郷湯島天神町三丁目　改進堂　同同區同町　鈴木書店
同日本橋區小網町　信文堂　同麻布區長阪町五十一番地　旭堂
同麹町區飯田町　洗心堂　同麻布區龍土町　齋藤書店
同神田區冥神保町　敬業社雜誌部　同同區櫻川町　萬春堂
同牛込區肴町　活神堂　同同區琴平町　華陽堂
同芝區柴井町　鴻盟社　同赤坂區田村町三丁目　梅田書店
同本郷區本郷四丁目　文榮堂　同麹町區一丁目　開進堂
同日本橋區濱松町　安田書店　三重縣津市大門町　河島九右衛門
同牛込區神樂坂上　正導社　函館末廣町　愛新軒
同同區通寺町　深野書店　京都寺町五條北入町　飯田信文堂
同淺草區北松山町　球水屋堂　同佛光寺通烏丸東へ入ル　東枝律書店
同本所區相生町五丁目　見珍堂　同寺町松原南へ入ル　改進堂

同油小路北小路上ル玉本町　興敎書院　福井縣福井

同東區瓦町四丁目　中村峰雄　福島縣岩代郡山

同博勞町四丁目　平井新聞店　同盤城白河天神町

岡山縣西大寺町　西崎友次郎　新潟縣新發田

横濱辨天通三丁目　神聲堂　同三條町

同本町　日之出屋　栃木縣宇都宮池上町

同太田町二丁目　日月堂　同栃木萬町

同同町三丁目　萬理商會　同足利町五丁目

高知縣京町　小島屋支舗　群馬縣前橋連雀町

同元町五丁目　船井新聞舗　同高崎田町

同多門通二丁目　島新聞舗　千葉縣千葉

上州新田郡本町　西村鐵藏　石川縣金澤市

埼玉縣熊ヶ谷驛本町　近榮堂　同加賀大聖寺

埼玉縣浦和宿妻門　中村朝二郎　長野縣松本本町二丁目

同八王子日町　熊澤傳四郎　同同町一丁目

同大宮驛　三育社　同上諏訪桑原町

神奈川縣横須賀　武田吉次郎　同長野吉田本町

同小田原緣町　石森堂　同

秋田縣南秋田上通町　鈴木鐵次　羽前國鶴岡五日町

同秋田市酒田港　白崎善助　同同茶町

仙臺市大町四丁目　木文商店　愛知縣名古屋市

富山縣富山市上ヶ立町　福田清明堂　同同

賣捌所

岡崎佐喜助

櫻井元吉

奥村書店

時事堂

須口屋

手塚祐次郎

上原與平二

三泉堂

報告堂

文心堂

立眞會社

菅々堂

羅世舍

高美書店

松榮堂

日新堂

長田象五郎

相塲書店

小池藤次郎

活眼堂

耐成堂

金號館

914.6
Tu651k

096118-000-7

914.6-Tu651k

小羊漫言

坪内 逍遥/著

M26

DBR-0395